

# 百人一首をめぐりて

谷田貝常夫

ここに書するは既に定説になれる事實の後追ひなれど、大方の世の人の氣づかぬことなれば、あへてのぼすものなり。

元祿の頃難波にありし密教僧契沖は、水戸義公光圀より求められて『萬葉代匠記』なる注釋書をものし、萬葉集の枕詞、撰者、萬葉假名などにつきての解説をなせるとともに、全ての歌につき詳細なる注釋をほどこせり。時の歌道の主流は、藤原定家の流れをくむ二條派にて、宮廷にても權威となれり。この二條派、傳統墨守を旨とせば、むつかしき趣向、俳諧めきたる趣向、あるいは異様な詞、手づくりなる詞、心まかせなるは堅く慎みて詠まざること、などの規制をしきたり。注釋にも固定せる解釋をなすのみ。

そこに反し、契沖は語句の注釋を基本に置き、密教僧に必修の、悉曇學習により論理的言語學を踏へたる實證主義をもととせり。「後々の人、しなんとするにいたりて、ことごとしき哥をよみ、あるひは道をさとれるよしなどをよめる、まことしからずしていとくし」なる在原業平の歌の評言は、それが立場によると共に、契沖は、「やさしく艶」を美の基準としてとらへをり、そこに契沖の文學批評の妥當なるがうかがはる。

『萬葉代匠記』における解釋の獨自性、實證性、さらには文獻學的方法は水戸公の意に適ひたるが、契沖はそれが執筆中にありても、考證の材料とせる古典作品の注釋をなせり。『古今餘材抄』古今集、『勢語臆斷』伊勢物語、『百人一首改觀抄』百人一首、などなり。

百人一首改觀抄の執筆せられたるよりおよそ六十五年の後、この書に出會ひて大なる衝撃をうけたるが、將來醫師にならんがために京都に留學中の本居宣長なり。「ここに難波の契沖師は、はじめて一大明眼を開きて、此道の陰晦をなげき、古書によつて、近世の妄説をやぶり、はじめて本來の面目をみつへたり。」契沖が方法論は宣長にも影響を與へ、大作『古事記傳』へとつながりたり。

『百人一首改觀抄』にて契沖、いくつもの新説を提示し、誤りを正す。その一つが二十二番文屋康秀の歌「吹からに秋の草木のしをるればむへ山風をあらしといふらん 古今秋下」なり。契沖、この歌人に不審ありとす。「是貞のみこの家の歌合歌人を左右に分け、詠んだ歌を一番ごとに優劣を定める文藝の哥と有。其家に秋の哥合ありし時《寛平五年893》の哥なり。」古今集所載の歌に白髪のこと詠めれば、此哥合の比まてながらへたらば七十餘歳なるべければ、盛（若）年の作者、紀友則壬生忠岑等に交はりて讀みたりとも覺えず。古今和歌六帖に今ひとつの哥を朝康とするにひかれて、これも康秀の子朝康が哥にやあらんと契沖推測す。

ここに大事出來す。百人一首三十七番は「文屋朝秀 白露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」なれば、一人の作者の歌二首撰ばれをりたり。ここに「百人一首」は、歌は百首なれども、歌人は九十九人となること、契沖の指摘によりて今や定説におさまれるところなり。百人一首には「よみ人しらず」の入撰なけれど、そこに例へば猿丸大夫などの人名を付したに違ひなきことも契沖が論より始るがごとし。

百人一首には論ぜらるべき謎多し。昭和五十三年に織田正吉氏『絢爛たる暗號 百人一首の謎をとく』なる一書を上梓し、百人一首にマトリックスの構造ありて、その解讀より定家に秘めたる意圖あり

として、好事家の耳をそばたてたり。日本の古典に謎多し。古今傳授もそのひとつならむ。變哲なき語句の解釋を墨守せむとする無意味なる因循姑息とみらるること多けれど、謎なればなにかか解明せんとするが今後の日本人の使命ならずや。

（平成三十年七月二十五日受附）